

新型コロナウイルスの感染が拡大するなかで、感染者や医療従事者などへのSNS上の誹謗中傷などで、悲しい出来事が生じています。コロナに伴う差別や偏見といった問題です。

日本赤十字社が、「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！～負のスパイラルを断ち切るために～」として、差別が起きる仕組みを紹介しています。ウィルスがもたらす第1の感染症は「病気そのもの」。第2が、ワクチンや薬が普及しておらず、わからないことが多いことで生じる「不安や恐れ」。そして、この見えないウィルスへの不安が、感染者という見える形で現れたとき、遠ざけようとし、第3の「嫌悪・偏見・差別」につながってしまうのです。さらに、この差別は、受診をためらわせ、感染を拡大させる負のスパイラルとなり、不安や差別を助長していきます。

こうした差別・偏見をなくそうと、感染症の差別・人権侵害に反対するフォーラムが開催されたり、地域団体で「感染症になっても安心して暮らせる学区民宣言」がまとめられたりするなど、市民活動の動きが広がっています。

愛媛県では住民有志が、特産のかんきつ類（シトラス）にちなんだりポンを身につける“シトラスリボン運動”を提唱。リボンの3つの輪が示すのは、地域、家庭、職場・学校で、コロナに感染しても、「ただいま」「おかえり」と安心して戻れる地域をめざそうとするものです。

運動は各地に広がり、長浜市内では練り物を扱う販売店が「シトラスリボンかまぼこ」を無償提供しました。



Citrus Ribbon
PROJECT

コロナ禍にあっては“市民協働”のあり方が問われてもいます。長浜市市民協働のまちづくり推進条例は、「当事者としてそれぞれの知恵と力を最大限に生かし、協働して地域の社会課題解決に関する取組を行う。互いを尊重し、対等な立場に立ち、ともに手を取り合い、それぞれの持ち味や特性を十分に発揮しながら、互いに協働する」ことを基本姿勢としています。

日々感染者数が報道されているなかで、感染が確認された“その後”にどのような行動がとれるのかで、地域や私たちの力が試されることになります。市民一人ひとりの行動が改めて求められています。

コーディネーター 田中省吾

差別や人権侵害に関する「緊急事態宣言」

（長浜市企業内人権教育推進協議会 令和2年4月30日）

- ① 感染者は悪くない。
- ② ネット・SNSでの差別や人権侵害をしない。
- ③ 差別や人権侵害を見すごさない。
- ④ 働く人をねぎらい、応援する。



※リボンの作り方

こちら 市民協働センターです！

VOL.02



今回は、「市民活動」という言葉について掘り下げてみたいと思います。

みなさんはこの言葉についてどんなイメージをおもちでしょうか。「自分たちの暮らす地域の課題を解決しようとしている」といった感じでしょうか。「社会や地域に対して意識の高い人がやっているもの」と

思われているかもしれません。忙しくてそんなこと考えられないよ…という方もいらっしゃるでしょう。

市民活動とは「放っておけないことに会ってしまった」人たちの集まりです。社会には大小多様な困りごとが転がっています。もしかしたら気づかずに暮らしていったかもしれないけど、気づいたからには関わらずにはいられない。取り組むテーマの種類や規模の差に関わらず、活動を通じて社会に関与し、仲間と出会うことの喜びが、市民活動の醍醐味といえます。

市民活動は利益を得る手段も少なく、手弁当で行われることも多いですが、「ボランティア」という言葉は「無償」という意味ではなく、「喜んで～する」という意味の「volo」というラテン語から来ています。つまり、楽しい、自分が望んでしたい、その気持ちが強い活動が市民活動であり、ボランティア活動につながっているということです。

こんな見逃せないデータもあります。社会参加の機会に恵まれた地域では、認知症やうつなどのリスクが低いということです。地域・社会に自ら関わっていくことは健康にもつながっていくといえるでしょう。

わたしたちは社会参加を通じて「市民」でありその地の「住民」になっていきます。

市民活動を考えることは「わたしたちが、この社会でどのように生きていきたいか」を考えることに近いかもしれません。

コーディネーター 大川千里

ご意見をお寄せください！

本誌は、市内各地域での困りごとや課題を紙面を通して見える化し、改めて考える場になることをめざしています。

そこで、掲載内容に関して皆さんからご意見をいただきたいと思えます。感想はもちろん「こんな内容を取り上げてほしい」「うちの地域ではこんなことに困っている」といったリクエストや情報も大歓迎です。QRコードから専用ページにアクセスください。



コラボ！読者アンケート入力フォーム

ながはま市民協働センター通信

コラボ！

Collabo!
2021
3
vol.03

特集

子育ての今 ～コロナ禍での支援をめぐって～



コラボ！今号の表紙

長浜市の出生数のうち、双子や三つ子といった多胎児の割合はわずか2%ほど。多胎児育児独特の苦労や不安をわかちあい、交流を行っているのが市民団体「kasikasi（カシカン）」。多胎児育児を応援するサポーターも募っています。

発行

ながはま市民協働センター

滋賀県長浜市高田町12-34さざなみタウン ながはま文化福祉プラザ
tel.0749-65-6525
8:30～21:30（火曜休館）
mail:katsudou@city.nagahama.lg.jp
http://www.nposhiga.com/



このまちに住んでよかった。長浜に暮らすみんながそう思えるように、さまざまな団体や個人が活動しています。その活動のかたち＝「長浜の市民協働」の今を伝えていきます。紙面の企画・編集・取材執筆・デザインはすべてながはま市民協働センターコーディネーターが担っています。

子育ての今

～コロナ禍での支援をめぐる～

不要不急の外出の自粛、密を避ける——。コロナ禍以降の生活が大きく変わったことにより子育て家庭の孤立が懸念されています。昨年の緊急事態宣言時を振り返りながら長浜での子育ての「今」を探りました。

1. 唯一頼れる場所

未就園児の子どもとその保護者の居場所、地域子育て支援センター（以下支援センター）の一つ、子育て広場スキップ（六荘まちづくりセンター内）。朝9時の開館と同時に親子が訪れます。保護者は絵本を読んであげたり、おもちゃで遊んだり、思い思いの時間を過ごし、職員とも会話を弾ませます。

ただ、昨年の緊急事態宣言発出時は市内8ヶ所の支援センターが一斉に休館になりました。3歳、9ヶ月の2子をもつ樋口裕美さんは子育て広場スキップをたびたび利用、当時をこう振り返ります。「下の子が生まれたばかり。実家は県外で頼る人もなく産後の身体がしんどいなか、家の中だけで子どもとの時間を乗り切らなければならなかった。支援センターの先生は、私にとって唯一頼れて助けになってくださる存在。早く会いたい一心でした」

2. また休館したら

支援センターの再開にあたっては消毒の徹底、時間の短縮、施設規模に応じた定員制など新しいルールを設置。ただ、すべての利用者が「戻ってきた」訳ではありません。「孫と来ていたが、『預かっている立場で何かあれば』と心配で行けない」「市内でも北部より南部の方が人口が多いのが気になって、北部の支援センターに行っている」という声を聞きます。

また職員側も「抱っこやタッチなどお子さんとの身体を通じた触れ合いが必要最低限になり、さみしくもどかしい思いをしている」と複雑な思いを打ち明けます。

曾我菜緒さんは、3歳、1歳5ヶ月の子をもち、現在第3子を妊娠中。「長浜に引っ越してきたばかり。夫以外には身内がいらないなかで、現在妊婦健診は感染対策のため子どもを連れて通院ができません。去年のように支援センターや一時預かりがストップしたらどうしたらいいのか」と不安を抱えます。



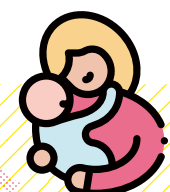
3. 直接ふれあう貴重さ

出産後の母子の健康のために、市では乳幼児健診などを実施しています。「新生児訪問」は母子の自宅に保健師や助産師が訪問しますが、コロナ禍以降は感染への不安から「人と会うことをできるだけ避けたいと話す保護者もおられた」と市健康推進課は話します。また「乳幼児健診」は感染対策を徹底していますが、集団での健診を不安がる保護者も。こうした事情に寄り添おうと、個別訪問や電話訪問に切り替えるなどの対応を進めています。

行政はじめ、子をもつ親に関わる市民活動団体は、直接会わなくても可能な支援に取り組んでいます。ただ「女性の就業支援セミナーの受講方法を人数制限した対面式とオンラインの選択制にしたが、8割が対面式を選ぶ」（子育て応援カフェLOCO）、「多胎育児に関する相談や情報交換をオンラインで行ってみたが、自宅でもできることが逆に育児や家事が気になって集中できない保護者が多かった」（kāsi kāsi）と、「コロナ禍のなかでできること」と「求められていること」の乖離があるようです。

令和元年 長浜市の出生数

951人



地域子育て支援センターは、現在公設4施設、民間委託4施設が運営。公設のうち、あいあいらんど（高月支所4階）では北部地域への出張広場も実施。

また、市では「産後ケア事業」を設置、利用者は日帰りや宿泊での心身ケア・サポートを市内医療施設などで受けられる。利用できる施設の一つ、まちのほけんしつ ぎずな（平方町）は0歳児育児支援に特化した支援センター。「困っている人はぜひ活用してほしい」と呼びかける。

4. 孤立の心配

支援側が一様に気をむくのが、“行くことができない”保護者に対してです。支援センターという「場」に出向くことや行政に相談することに、ハードルを感じてしまう保護者が少なからずいます。関係者は「孤立して育児に困っておられないか、非常に心配」と声を揃えます。こうした保護者の場合でも、従来は「離乳食講座」「お話会」など目的設定があると比較的参加しやすいうえ、保護者同士をつなぐ場になっていたものの、現在支援センターのイベントの多くが中止かオンライン開催にとどまっています。

かつては「地域で子どもを支える」気風のもとに子どもの

【オンラインとは】 ……パソコンやスマホのビデオ会話機能を用いたコミュニケーション。インターネット環境があれば在宅でできるのがメリット



各支援センターでは安全対策のため遊具を減らす傍ら楽しめる場にしようと模索。サンサンランドでは子どもたちの動線が広がるようにフロアの床面を活用。消毒は、開所中時間を決めて徹底的に行う

支援センターの一つ、サンサンランド（地福寺町）の北谷真子センター長は「利用者さんは、職員との何気ない会話のなかで『そういえば』と悩みや困りごとを打ち明けてくださっていたのだと、再確認しています」と話します。

市で行われている子育て支援の一部

子育てコンシェルジュ

妊娠出産育児に関するあらゆる不安や悩みに保健師が対応。電話等での相談にも対応

ながまるキッズ！アプリ

市内の子育て支援に関する情報を集約。支援センターの混雑状況を発信

ながまるキッズ！のウェブページ。アプリにもアクセスできる ▶

子育て応援動画

子育てにまつわる各種動画配信を配信

市公式You tubeチャンネル ▶
「はま～るtb.」

